はじめに

親鸞聖人は、念仏に生きる真宗（浄土真宗）諸派の宗祖です。平安時代の最末期に誕生し、鎌倉時代の半ばまで九十歳（数え年）に到るという長い人生を送りました。

その親鸞聖人は九歳で仏道に入りました。そして苦しい修行生活を経て、二十九歳から法然上人のもとで「人は念仏をひたすら称えることによって阿弥陀仏に救っていただける」という「専修念仏」を学びました。三十五歳の時、後鳥羽上皇によって越後国に流されましたが、四十二歳の時に関東に行くまでの七年間のうちに、その念仏は「信心と報謝」に基づくと確信するに至りました。

以後、親鸞聖人は自身の教学の確立に努め、同時に人々を「信心と報謝」の念仏によって導くことに力を尽くしました。

ここで注目すべきは、「報謝」という言葉です。鎌倉時代の「報謝」は現代日本語では「感謝」と言い換えられますけれども（鎌倉時代には「感謝」という言葉はありませんでした）、でも意味はまったく同じではないのです。

現代の「感謝」は、他の人から恩を受けて「ありがとう」と言葉で、心で言えば、それで終わりにできます。しかし鎌倉時代の「報謝」は、目に見えるお礼をしなければいけなかったのです。目に見えるお礼とは、例えばお金、品物、行動などを使ってです。これは仏教界だけではなく、社会一般のことでもありました。

親鸞聖人は念仏によって自分を救ってくださった阿弥陀仏に対して、そして阿弥陀仏の救いに自分を導いてくださった法然上人をはじめとする人々に対して、無限のお礼をし続けました。それは人々に念仏の救いを伝え続けていくことです。そこにどんな困難があろうとも、です。

親鸞聖人は関東から六十歳のころに帰京し、念仏布教の活動も続けました。しかし八十歳前後からその活動に特に困難な状況に直面し、それを乗り越えるべく、驚くべき努力の数年間を送りました。そして八十六歳の時、布教の悩みを乗り越えた「自然法爾」の境地に達し、以後、静かな最晩年を送ったのです。

また親鸞聖人は、二十九歳で知り合い、結婚した妻の恵信尼さまがいたからこそ、困難がありつつもいっそう充実した人生を送ることができたと言える、と筆者（今井）は考えています。

筆者は歴史学研究を専門にしています。本書は親鸞聖人の一生について、歴史学的観点から執筆するものです。すなわち本書の展開は、まず聖人の時代の社会、家族のあり方、信仰のあり方等を把握します。その上で、聖人の家族や出身の日野家、恵信尼さまやその出身の三善家（みよしけ）のありさまを見ながら、聖人がどのような苦労や努力の道を経てその信仰の中心である「信心と報謝」の念仏に到ったのか、を明らかにする考えです。

親鸞聖人については、現在に至るまでさまざまな伝承が生まれています（草野顕之氏『親鸞伝の史実と伝承』法藏館、二〇一二年）。そして歴史上の人物の伝記を検討する上ですべてについて言えることですけれども、伝承をどのように史実の中に組み込んでいくか。重要なことです。

本書は、『親鸞聖人の念仏の道〈上〉―「信心と報謝」に到る―』と題し、四十二歳までの、いわば聖人の前半生を述べていきます。

筆者は、ふだん、単に昔のことを興味本位に掘り下げるという作業をしているのではありません。あくまでも筆者が生きている現代社会に視点を据え、現代および将来の社会がよりよくなるようにとの願いのもとに、歴史の研究を続けています。本書で

は、親鸞聖人が歩いた道が現代と将来の人々を導くだろう、という意識のもとに述べていきます。

以下、本書では親鸞聖人、恵信尼さま、そしてお二人の師匠であった法然上人の敬称は省略させていただきます。また引用史料は、断りのない限り、聖教編纂室編『真宗聖典〔第二版〕』（東本願寺出版、二〇二四年）からです。また漢文の史料は読みにくいので、読み下しにして使わせていただきました。

二〇二六年九月一日

今井雅晴

親鸞聖人の念仏の道〈上〉―「信心と報謝」に到る―

目　次

はじめに……3

第一章　親鸞の誕生と幼いころ……23

一、親鸞、日野氏に誕生　23
親鸞、日野有範の子として誕生　23
日野の里は親鸞の誕生地か？　24
有範は日野家の分家のそのまた分家　25
母は吉光、貴光との説あり　26
親鸞、母の家で生まれ、母の家で育つ　26
貴族の苦しい出世争い　27

二、親鸞の祖父の日野経尹　29
「放埒の人」経尹　29
『尊卑分脈』の稀な悪口　29

三、親鸞の伯父の日野範綱
——後白河法皇の近臣として活躍——　31
範綱、後白河法皇に仕える　31
範綱、平清盛に流される：
鹿の谷の清盛打倒の陰謀　32
範綱、木曽義仲に免職される　33
後白河法皇、源頼朝の
「大将軍」要求を拒否　33
範綱、頼朝に免職される　35
範綱、源頼朝に後白河法皇との
連絡役を任される　35
範綱、後白河法皇の棺桶を担ぐ　36
範綱の息子尊蓮、親鸞から
『教行信証』の書写を許される　37

四、親鸞の伯父の日野宗業
——後鳥羽上皇の近臣として活躍——　38
宗業、大学寮（文章道）に
入学、猛勉強をする　38
宗業、大学寮を十四年後に卒業　38
宗業、平清盛の横やりで
合格証明書取り消し　39
九条兼実、宗業の学力を大評価　39
後白河法皇、宗業の再びの
大学寮卒業を認める　40
宗業、後鳥羽上皇の近臣となる　41
宗業、年号「建仁」「建保」を作る　42

五、親鸞、勉学を始める　43
六歳の親鸞、勉学を始める　43
漢文・漢詩の暗記　43
父と伯父たちの苦学　45
親鸞、勉学に伯父の
宗業の指導を受ける　46

六、貴族の女性の勉学　47
手習い・和歌・お化粧　47
お針（夫の安全）・
使用人指揮・交際（夫の出世）　48

第二章　貴族の信仰生活……50

一、貴族と寺院・僧侶　50
大寺院と僧侶の導き　50
よく知られた大寺院　51

二、貴族と朝題目・夕念仏　54
「朝題目・夕念仏」とは　54
法然と熊谷直実の一日六万回の念仏　55
「朝題目・夕念仏」は貴族の信仰　56

三、家族で寺院参詣　57
家族で寺院参詣　57
家族で僧侶の草庵参詣　58

四、病気・出産で僧侶を招く　58
授戒（受戒）　58
法然、正しい内容の戒律を受け継ぐ　59

第三章　親鸞の出家……61
一、親鸞出家の背景　61
親鸞の立場について、
『本願寺聖人伝絵』の主張　61
親鸞の父日野有範の破滅　63
源頼政、平清盛を裏切る　65
以仁王、勝手な還俗　65
二、親鸞の出家の戒師は
天台座主の慈円か？　66
出家の戒師は慈円＝
『本願寺聖人伝絵』の説　66
不遇な立場の慈円と兄九条兼実　68
権力者範綱、
甥親鸞の学問成就を願ったか　68
三、親鸞と弟たち　69
第四章　親鸞の延暦寺での修行……71
一、天台宗の修行　71
最澄、天台宗を中国からもたらす　71
覚如紹介の天台宗　71
南岳大師　72
天台　73
三観仏乗　73
楞厳横河の余流　74
四教円融の義　74
親鸞の恩愛の苦しみ　75
慈円の父と母を偲ぶ和歌　75
二、比叡山の念仏信仰　76
空也：阿弥陀聖と呼ばれる　76
恵心僧都源信：
日本浄土教の基礎を築く　78
『往生要集』と『一乗要決』　79

三、黒谷の念仏者と三善為康　80
三善家：学問の家　80
算博士・越後介三善為康　81
比叡山黒谷の念仏者と親しかった為康　82
為康の信心の念仏　84
四、「堂僧」を巡って　85
親鸞の役職「堂僧」　85
「堂僧」はどの程度の身分の役職か？　86
第五章　親鸞、比叡山を下り、京都六角堂に参籠する……87
一、なぜ親鸞は修行途中で比叡山を下ったのか？　87
親鸞、百日間の予定で六角堂に参籠　87
親鸞が比叡山で求めたもの　88
何が親鸞の求めを妨げたのか？　90
『高僧和讃』の「龍樹和讃」を手がかりに　90
「龍樹和讃」第九首　91
「龍樹和讃」第十首　93
二十年間の苦しみ・悲しみ：恩愛　93
恵信尼への愛情　94
伯父宗業が作成した新元号「建仁」　95
二、六角堂と聖徳太子　97
六角堂参籠の目的　97
親鸞の参籠は聖徳太子の導きを得るため説　98

歴史上の聖徳太子　98
聖徳太子信仰は十一世紀のころに
　天台宗で生まれた　99
親鸞の若いころ、「聖徳太子は
　観音菩薩の生まれ変わり」説は
　広く存在していたのか？　100
聖徳太子は小野妹子を
　六角堂で出家させたか？　101

三、六角堂と観音菩薩　101
聖徳太子に願うなら
　比叡山を下りるべきではない　101
六角堂の本尊は特に有名な観音菩薩　102
『梁塵秘抄』に見る社会の強い観音信仰　102
比叡山の僧侶全員が抱く聖徳太子信仰　104

四、六角堂観音菩薩の夢告　105
観音菩薩の夢告　105
親鸞にとっての女性の重要性　107

第六章　親鸞、
　法然に専修念仏を学ぶ……108

一、法然と吉水草庵　108
法然、専修念仏を唱える　108
専修念仏、世に広まる　108

二、親鸞、吉水草庵に法然を訪ねる　109
親鸞、百ヶ日、法然のもとに通う　109
親鸞が法然のもとに通った季節　110
親鸞、法然から教えを受ける　111
親鸞、法然の人間性に魅了される　112
六十九歳の法然と二十九歳の親鸞　113
法然、結婚は問題なしとする　113

第七章　親鸞、恵信尼に出会い、結婚する……115

一、出会いについての従来の説　115
京都説と越後説の並立　115
越後説の強調＝第二次大戦後　115
出会いは京都、
親鸞・恵信尼ともに貴族の出身　116
吉水草庵での親鸞と恵信尼との出会い　117

二、親鸞、恵信尼と結婚する　119
親鸞と恵信尼の交際　119
三善為教、娘の恵信尼と
親鸞との結婚を許す　120
親鸞、恵信尼と結婚する　121
結婚式　122
善鸞の母と玉日姫　123
玉日姫伝説　124
その後の善鸞　124

第八章　吉水草庵における親鸞の活動 …… 126

一、親鸞、法然から
『選択本願念仏集』の書写を許される　126
親鸞、『選択本願念仏集』を書写する　126
法然、親鸞書写の
『選択本願念仏集』に、
内題等を自筆で記入する　126
親鸞、法然の肖像画を
借り受け、書写させてもらう　127
『選択本願念仏集』書写を
許された者は十人程度か　127

二、「信不退・行不退」（信行両座）論争　128
法然はいかに念仏を勧めたか　128
親鸞伝研究における『本願寺聖人伝絵』　130
「信不退・行不退」論争　131
法然の反応　133
「信不退・行不退」論争の評価　134
「信不退・行不退」論争は覚如の創作か　134

三、「法然の信心と親鸞の
信心とは同じか異なるか」論争　135
信心：法然と親鸞は同じか　135
法然の反応　136
吉水草庵における「信心」　137
覚如の深い思いやりの創作　138

四、親鸞の伝記上の重要な二つの挿話　139

第九章　親鸞、後鳥羽上皇により流刑とされる……140

一、法然の専修念仏に対する
延暦寺・興福寺と上皇・貴族たち　140
延暦寺と興福寺　140
上皇・貴族たち　141

二、後鳥羽上皇、
法然と門弟七人の流刑・
門弟四人の死刑を命令する　142
後鳥羽上皇の院宣と親鸞の
『教行信証』における非難　142
「王法」と「仏法」の正しい理解　143
後鳥羽上皇は仏法、
さらには専修念仏に
従う義務はない　145
「禿」は「おかっぱ」　146
仏教者として正しく生きる　147

三、後鳥羽上皇、女官の出家を怨み、
出家させた者を怨る　148
安楽・住蓮の美声の『六時礼讃』　148
『法然上人行状絵巻』の示す女官の出家　149
『法然上人絵伝』の示す女官の出家　150
『愚管抄』の示す女官の行動　151
後鳥羽上皇、愛人たちの無断出家を
大いに怨み、手助けした者たちを怨る　152
朝廷の方針決定の手続き　153
治天の君　153
親鸞、後鳥羽上皇と貴族たちを非難する　154
承久の乱後の『教行信証』執筆　154

四、後鳥羽上皇、流刑にあたり、
親鸞を還俗させる　155
「流刑の決定⬇還俗」ではなく、
「還俗の決定⬇流刑」　155
親鸞と恵信尼、正式の結婚に至る　156

第十章　親鸞の流刑先が
なぜ越後国だったのか……158

一、五種類の刑罰と流刑（流罪）　158
五種類の刑罰　158
本来の流刑のありかた　160
頭を冷やさせるための流刑　160
『教行信証』の「遠流」の意味　161

二、親鸞、越後流刑と決まる　162
三善家の関係地　162
伯父の日野宗業、越後権介に任命される　162

第十一章　越後での生活＝
「信心と報謝」の念仏に至る……164

一、越後国の国府までの旅　164
流刑地に連れていく領送使　164
「親不知・子不知」を
転げ落ちることはない　165

二、現地での日常生活　166
担当の農民が行なう田畑の仕事　166
身分は保証　166

第十二章　越後における親鸞の信仰生活……168

一、吉水草庵の信仰生活＝消費生活の中での念仏の学び　168
充実していた吉水草庵の信仰生活　168
消費生活の中での念仏の学び　168

二、越後国での信仰生活＝生産生活の中で「信心と報謝」の念仏に至る　169
親鸞、突然法然から切り離される　169
消費生活の中から生産生活の中へ　170

三、武士と農民の社会　170
社会の指導者＝武士　170
勧農と勧農権　171
複数の領主たち　172
御恩と奉公　172

四、親鸞の越後での「信心と報謝」の念仏　173
信心の念仏に強く生きる　173
報謝の念仏へ　174
「信心と報謝」の念仏を武士へ布教　174

第十三章　流刑地越後における「信心と報謝」の念仏の確立……176
一、「信心と報謝」の念仏の確立　176
時代の要求を自覚　176
流刑に遭った喜び　176
布教の責任　177
越後国内でできる自由な活動　178
二、日野宗業、越後権介を解かれる　179
第十四章　親鸞の流刑赦免……180
一、親鸞と恵信尼との子どもたち　180
第一子小黒女房生まれる　180
日本の縦系図のあり方　181
二、親鸞と恵信尼との第二子信蓮房生まれる　182
三、親鸞、流刑を許される　183
親鸞、ほぼ五年で流刑を許される　183
法然、帰京後に亡くなる　184
四、親鸞、流刑赦免後も越後に留まる　184
親鸞、念仏布教の意欲　184
恵信尼もなぜ帰京しなかったのか　185

第十五章　親鸞、関東へ向かう：
親鸞と恵信尼の迷いから確信へ
―信心の念仏と観音菩薩―……186

一、関東へ向かった理由　186
親鸞一家、関東へ向かう　186
従来の関東行き説の疑問点　187
関東・鎌倉を目指す僧侶たち　188
日本国王の折伏を目指す日蓮　189
親鸞も新しい武士の都を目指す　190

第十六章　関東への旅
―「信心と報謝」の
念仏の動揺と克服―……191

一、親鸞の関東行きの
援助者＝宇都宮頼綱　191
稲田頼重　191
宇都宮頼綱―稲田頼重の兄。百人一首　191
法然の門弟の頼綱　192

二、関東に向かって出発する　193
関東行きのコース　193
善光寺と善光寺如来像　194
善光寺三尊像と阿弥陀三尊像　195
親鸞と善光寺信仰　195
本寺専修寺の一光三尊像　196
『善光寺和讃』は親鸞作か、どうか　197

三、千部経読誦とその中止
—「信心と報謝」の念仏の動揺と克服— 198
親鸞、千部経読誦を始める 198
千部経読誦とは何か 199
親鸞、千部経読誦を中止する 200
恵信尼、見守る 202

四、恵信尼の「夫親鸞は
観音菩薩の生まれ変わり」の夢
—関東での布教生活の不安と克服— 203
恵信尼、常陸国幸井で宿泊する 203
恵信尼、堂供養前夜祭の夢を見る 204
阿弥陀堂の前の鳥居 205
恵信尼の「親鸞は
観音菩薩の化身」との夢 206
恵信尼はなぜ親鸞は観音菩薩の
化身という夢を見たのか 207
恵信尼の確信 208

五、恵信尼の夢の
「信心と報謝」の念仏に
関わる意義 209
観音菩薩と勢至菩薩 209
「報謝」の念仏布教の確信と喜び 210

おわりに 212

【凡例】

・引用中の［　］内は割り注を指します。

・本文中の〔　〕内は、著者による意訳を指します。

第一章　親鸞の誕生と幼いころ

一、親鸞、日野氏に誕生

親鸞、日野有範の子として誕生

親鸞は、承安三年（一一七三）、日野有範という中流貴族の長男として生まれました。七年後には源頼朝が伊豆国で平家打倒の挙兵をするという、平安時代の最末期です。日野家は藤原鎌足の子孫とされる家で、系図をたどれば次のようになります。

藤原鎌足―不比等―房前（藤原北家）……真夏（日野）…経尹―範綱
　　宗業
　　有範―親鸞

この藤原氏では、平安時代後期に親子で摂政・関白を七十年近くも務めた、道長・頼通父子が特に有名です。その父子の時代は、摂関政治の全盛期でした。摂関政治と

は、摂政あるいは関白が天皇に代わって実権を握る政治です。

日野家は、藤原鎌足の孫の四人の兄弟を始祖とする四つの家柄、すなわち北家・南家・京家・式家の中の北家の一員です。藤原真夏（ふじわらのまなつ）の時から「日野」という名字を名乗りました。これは現在の京都市伏見区にあった日野の里に領地を得たからです。そこはのちに日野家の別荘地になりました。

また北家からは摂関家も出ました。

日野の里は親鸞の誕生地か？

この日野の里は京都御所から八キロ以上あります。当時、京都御所（朝廷）の勤務開始時刻は、朝、太陽が昇る時でした。とても早い時刻の上、遠くて日野の里からの毎日の往復は無理でしょう。住居はもっと近いところに設ける必要があります。有範の兄宗業（むねなり）の屋敷は京都四条通りにあったことがわかっています。御所から二、三キロの所です。これなら勤務の往復が楽に可能です。

それに後述するように、当時の生活慣行では、親鸞は父の家ではなく、母の家で生まれたと推定されます。その母の素性は不明なのです。

以上によって、親鸞は日野の里で生まれたとすることは困難です。

有範は日野家の分家のそのまた分家

貴族でありますが、日野氏は摂関家の繁栄からははずれていました。しかも親鸞の父日野有範は、日野家の分家のそのまた分家といった位置にありました。

ただ正確に言えば、このころにはまだ身分を示す「貴族」という言葉は存在していませんでした。存在していたのは、「貴」と「通貴（つうき）」という言葉でした。およびその下の者たちもあわせて、それらは朝廷から叙された官位によって分類されていました。

「貴」とは、官位の正一位・従一位から従三位まで、合わせて六段階のいずれかに叙された人たちのことです。彼らは、「上流貴族」と通称されています。また正四位上から従五位下までの八段階に叙された人たちは、「通貴」といいました。同じく通称は「中流貴族」で、その中の下位の人を「下流貴族」と呼ぶこともあります。

「貴族」は、正確には該当する位に叙された本人だけなのですが、一般的には家族も含めてそのように称しています。

貴族の残りの正六位上から従八位下に続く初位（そい）までの十三段階は、「貴」にも「通貴」にも入っていませんので、正確には貴族ではありません。しかし、「下流貴族」に含めてしまうこともあります。

母は吉光、貴光との説あり

親鸞の母についてはよくわかっていません。親鸞没後百年以上経った南北朝時代、親鸞の母の名は吉光ないし貴光です、という説が出ました。源義家の子孫という説もありました。しかし、これ以上はわかりません。わかりませんが、親鸞が母の家で育ったことは確実でしょう。それは当時の男女関係や結婚・家庭生活のあり方によります。

親鸞、母の家で生まれ、母の家で育つ

当時の男女交際から結婚生活は、男性の通い婚でした。男性は夜、晩御飯を食べてから女性の家に行きます。そして朝、暁に帰ります。平安時代・鎌倉時代の日本語「暁」は、現在の「朝早く、東の空が少し赤くなってきた時」ではなく、「その前のまだ真っ暗な時間帯」のことです。三時から五時といった時間帯です。

当時の男女は、結婚ということになっても同居生活はできません。それ以前と同じく、妻の家に通うのです。同居することが認められるのは、子どもが生まれてからです。「結婚したら同居する」、あるいは現代の同棲のように、「結婚の前から同居する」という考えはなかったのです。